

# 鶴羽

世阿弥作

季は	地は	ワキ	後	ツレ	前
秋	日向	シテ	前に同じ	シテ	官人

豊玉姫

「伊勢や日向の神なりと。く。誓ひはおなじかるべし。

詞  
「抑是は当に仕へ奉る臣下なり。さても九州鵜戸の岩屋は。神代の古跡にて御座候ふ程に。此度君に御暇を申し。唯今九州に下向仕り候。

道行  
「旅衣。猶立ち重ね行く道の。く。浦山かけてはるぐと。馴れて心を筑紫渦。鵜戸の岩屋に着きにけり。く。

シテ、ツレ一声  
「鵜の羽ふく。今日の御祓ぞ神の小屋。立つ浪風も心せよ。

ツレ  
「うどの岩屋の神の代を。

二人  
「思へば久しあきつ国。

シテサシ  
「有りがたや過ぎし神代の跡とめて。聞けば昔に帰る浪の。

二人  
「白木綿かけて秋風の。松にたぐへて磯の宮。鵜の羽葺くなり浜庇。久しき國の例かや。

下歌 「實に名を聞くも久堅の。其海人乙女数々の。手向

草をさゝげん。

上歌 「誰も實に。神に頼みをかけまくも。／＼。忝しや此御子の。御母の名を聞くも。豊玉姫のいにしへ。げに心なき我等まで。海士の刈る藻の露程も。恵みになどかあはざらん。／＼。

ワキ詞 「いかに是なるかたぐに申すべき事の候。

シテ詞 「此方の事にて候ふか何事にて候ふぞ。

ワキ 「ふしぎやな是なる仮殿を見れば。鶴の羽にて葺き。

シテ 「今一方をば葺き残されて候ふは。何と申したる謂れにて候ふぞ。

シテ 「實にく御不審御理りにて候。鶴の羽にて葺きたる事に付きてめでたき謂れの候。委しく語つて聞かせ参らせ候ふべし。

ワキ 「あらうれしやねんごろに御物語り候へ。

シテ 「抑地神五代の御神をば。鶴の羽葺き合はせずの尊

と申し奉る。其父の御神釣針を魚に取られ。龍宮まで尋ね行き給ひ。豊玉姫と契りをこめ。釣針に満千の珠を添へ取りて帰り給ふ。程なく豊玉姫御懷妊ありしかば。此磯辺に仮殿を作り。いまだ葺き合はせざるに尊生れさせ給ふにより。鶴の羽葺き合はせずのみことゝ申し奉る。されば其誕生日も此秋の今日に当りたれば。嘉例にまかせて仮殿を作り鶴の羽にて葺き候ふなり。

ワキ  
「謂れを聞けば有りがたや。遠きためしも今こゝに。

シテ  
「宮居もさぞな千早振る。

ツレ  
「神の御祓の政。すぐなる御代に跡垂れて。

ワキ  
「今も日を知る神祭り。

シテ  
「いそげや磯の浪に鳴く。

ワキ  
「千鳥もおのが翅そへて。

シテ  
「鶴の羽重ねて。

ワキ  
「葺くとかや。

地

「浦風も松風も。く。ひかたやはやち浪おろし。

音を添へ声を立て。とぼそも軒も鶴の羽風。吹け  
やく疾く吹け。吹くや心にかかるは。花のあたり  
の山おろし。更くるまを惜しむや。まれにあふ  
夜なるらん。此まれにあふ夜なるらん。面白やは  
とても。實に世の中の品々。いかなれば陸奥には。  
鳥の羽を糸にして。衣を織るとかや。いかなれば  
此国は。鶴の羽葺くなり神の小屋の。恵み庇のあ  
しかりや。世のふしを顯はすもや。神の誓なるら  
ん。

ロング地

「軒の雨。古き言の葉取り添へて。手向ぞまこと真  
らねて葺くとかや。

シテ  
「軒の雨。古き言の葉取り添へて。手向ぞまこと真  
鳥住む。うなでの杜の落葉を。拾ひ上げいざや葺  
かうよ。

地  
「拾ふ汐干のたまくも。折を得たりと夕暮の。

シテ  
「月すでに出で汐の。影ながら葺かうよ。

地  
「かげもしげきの八重櫛。葉色を添へて葺く程に。

シテ  
「重なる軒の忍草。

地  
「忘れたり葺きさして。

シテ  
「少しばは残せ。

地  
「名を聞くも。葺き合はせずの。神の御仮屋。葺  
き残せく。しかも月の夜すがら。影諸共に我も  
出で。洩る影は天照らす。神代の秋の月を。いざ  
やながめ明さん。

ワキ詞  
「鶴の羽葺き合はせずの謂れ委しく承り候ひぬ。さ  
て千珠満珠の玉のありかは何くの程にて候ふぞ。

シテ詞  
「さん候玉のありかも有りげに候。誠は我は人間に  
あらず。暇申して帰るなり。

ワキ  
「そもそも人間にあらずとは。いかなる神の現化ぞと。  
袖をひかへて尋ぬれば。

シテ  
「終にはそれと白浪の。龍の都は豊かなる。玉の女

と思ふべし。

ワキ 「龍の都は龍宮の名。又豊かなる玉の女と聞けば豊

玉姫かとよ。

シテ 「あら恥かしや白玉か。

歌 「何ぞと人の問ひし時。露と答へて消へなまし。な  
まじひに顕はれて。人の見る目恥かしや。隔ては  
あらじ蘆垣の。よし名を問はずと神までぞ。唯頼  
めとよ頼めとよ。玉姫は我なりと。海上に立つて

失せにけり。 ク。 (中入)

ワキ歌

「うれしきかなやいざさらば。 ク。 此松陰に旅居  
して。風もうそぶく寅の時。神の告をも待ちて見  
ん。 ク。

後ジテ

「八歳の龍女は宝珠を捧げて変成就し。私は潮の満  
干の瓊を捧げ。国の宝となすべきなり。南無や帰  
命本覚真如の玉。

地 「或は不取正覚の台の玉。

シテ  
「または無量寿法界。円満神通の珠。

地「おの／＼様々多けれど。山海増減のみちひの珠。

実に妙なれやあら有難や。

地「干珠を海に沈むれば。／＼。さすや潮も干渴となりて。寄せ来る浪も浦風に。吹きかへされて遠干渴。千里はさながら雪を敷いて。浜の真砂は平々たり。

シテ  
「さて又満珠を汐干に置けば。

地「さて又満珠を汐干におけるべ。音吹きかへて沖つ風。汐をも浪をも吹き立てゝ。平地に波瀾を立て寄せ立て寄せ。山も入海々をも山に。成す事やすき満干の珠。かほどに妙なる宝なれども。唯願はしきは聖人の。直なる心の真如の玉を。授け給へや授け給へと。願ひも深き海となつて。其まゝ浪にぞ入りにける。

底本.. 国立国会図書館デジタルコレクション  
『謡曲評积 第四輯』 大和田建樹著